

〔法学新報〕第24巻6(276)号 大正3年6月1日

○中央大学経済学会 同会は去月三日午後一時より中央大学大講堂に於て開会せられたるか定刻会長桑田法学博士は開会の辞を述べられ次て田川大吉郎氏は我国の経済的發展といふ題下に海外に於ける我國民の經濟上の地位は却て支那人に苦かざるの事實あることを論し其原因を探究して我國民の同化性の欠乏に在りとし大に警告する所あり次に福田徳三博士は「變態株式會社を論して三井物産會社に及ふ」との演題を提けて登壇せられ博士は家族的關係に基く株式會社に付きて論しパツソウ氏株式會社論を引きクルップ鉄工場を例証し縷縷として尽きさるものあり最後に三井物産の不正事件の原因を摘発し是れ株式會社にして株式を一般公衆に分有せしめず三井家及び之と密接の關係ある一部人士の間のみ分配せられ而も事實に於て三井一家か株式を保有し而して會社計算に付き社會の監督殆ど之なきか故なりと論し三井物産會社の不正事件は暫く許すへきも其帳簿の改削を爲したるは是れ婦人の貞操を破りしに比すへくして断し

て許容すへからすと爲す續て植原悦次郎氏は「捕はれたる政治經濟學」なる演題にて現今我國多數學者が専心攻究するは主として terminology の問題にして現在社會の活問題に迂なるは比皆然りと言はざるを得ず斯の如くにして何所にか學者の權威を見出し得へきやと論し最後に添田博士は「日本の財政」に付きて論説欄に掲げたる如き意見を述べられ夕刻に及びて閉会したり(委員報)